北の小さな生きものたち

永田洋平

北海道の原野に移り住んで、ちょうど半世紀になる。野生の動物たちの寿命が、四、五年から十年そこそことみると、それらの仲間たちとは、五代から十代にわたってつきあってきたことになる。そして、その割りには、その連中のことどもについては、余りにもまだ、おおざっぱなことしかわかっていない。いうなれば、いつも親戚面をして、つきあっていながら、その実、この動物たちの生きざまを、時間と時間のはざまから、ちらちらと垣間みてきたに過ぎないと思ったりしている。

現代では、科学やその機器類が高度に発達して、それに関する、あらゆる情報網が、より豊かに、正確に収集され、整理され、解析されるようになったが、それとても、その生きものについては、余りにも未知な部分が多い。つまり、大方の個体や群れの日常活動や、その活動のピークや、食性や環境への適応などといったことは、それらを駆使したり、その時どきの調査の実施などによって、いずれも大きな成果をあげてはいるけれども、それも断片的に過ぎない。スチールカメラの撮影によるフイルムも、何百分の一といったほんの一瞬の動かぬ映像しかみせてくれないし、シネもＶＴＲも五十歩百歩。こうしてみると、やはり野生の生きものは、自らその目で確めていく態度を重くみる。

十数年ほど前の秋、シラルトロ湖から釧路川に流れ出る水路で、おそらくイトウだったと思う大魚を、ミサゴが掴んで水中に引っぱり込まれて、あわや溺死かと思わせる場面を目撃したことがある。シマフクロウも、このミサゴと同じように魚食性であるが、普通には深みでは、手に負えない大型の魚類は漁猟しないものだが、ときには水の濁りや、そのときの気象状況によっては、そうしたドジを踏むことさえあるのである。またそうした生きざまは、余りにも偶発的で、かつ瞬間的で、ほとんど目による観察しかない。水面をひらひらと飛び交うショウドウツバメが、おそらくこれもイトウとみられる大型の魚類に水中にもっていかれる光景も、カメラではとらえられなかった。

イトウといえば、これもほぼ十数年も前の冬のことになるが、一度、釧路湿原の中のヤチマナコと呼ばれる隠れ湧水池にこのイトウ

をのぞきに出たことがある。今は亡き下雪裡の八重九郎さんが「昔はもっといたが」といいながら案内してくれた。雪裡側の台地から釧路川に注ぐ渡辺川の中流あたりである。八重さんは、「渡辺川とは、シャモがつけた川の名だが、ほんとうは、ワッタラッペ・チライ（イトウ）が冬越しするところ、という意味だ」と、教えてくれた。夏には、川は草に覆われてみえなくなるほどの細い流れに過ぎないが、底が深く、岸に沿って無数のヤチマナコをもっていた。その折ここで、わたしのみたイトウは、凍結したミズゴケの穴から五十センチか六、七十センチの型のものをわずかに二尾みたに過ぎなかったが、八重さんは、チライもこれほどになると、カムイたち（おそらく、シマフクロウやミサゴだと思う）も手に負えないといった。「だから、チライはこの湿地で大きく育つのだ」ともいったことを今でもはっきり覚えている。

明治二十年代末期のころ記された河野常吉と、一色藤之助の野帳、いわゆる河野メモによると、釧路湿原や、その周辺（虹別・標茶・弟子屈）の河川では、毎年二百頭に近いカワウソとテン。数百羽のオジロワシやオオワシが狩られていた。カワウソやテンの毛皮は輸出先がさだかでないが、オジロワシやオオワシの尾羽根は狩猟用の矢羽根として主に中国に輸出されてたと記されている。

オオワシとオジロワシは現今でも冬期に観察されるし、ときには夏季にオジロワシは営巣もするけれど、カワウソについては、現在の日本では四国のごく一部の河川をのぞけば、あとはまったく根絶やしにされてしまった。惜しまれるのは、北海道のカワウソと、釧路湿原とのかかわりあいが、なに一つ探ぐられることもなく、この地上から葬り去られてしまったことにつきる。

カワウソについて河野メモには、百頭を狩るのに、五里四方（二十キロ平方）の川を回って、おとしや、とらばさみ（トラップ）で収獲したとあるから、いわゆる当時のラッコや、カワウソ専門の猟師の狩猟の常識（四頭のうち二頭間引く）からすれば、この湿原一帯の河川には、そのころ数百頭に余るカワウソが生息していたと思われる。

だが、この貴重なメモは、一方ではカワウソやテンの捕獲が、当時一般には産業として受けいれられていながら、根絶やしにしないための狩猟の不文律やモラルがまだ猟師間にゆきわたっており、歴史的にみた湿原の環境も、ほぼ満足のいくものであったことを物語っている。そして、それにもかかわらず河野メモの時期から近々三十年たらずのうちに、この動物が根絶やしにされたのは、その間に多くの移民の入殖と、火器の発達と普及があり、獲る産業意識のゆき過ぎと、危機感の欠落があったからだと思う。

ちなみに、昭和二十年の終戦ごろまでは、これも往年の勢力こそみられなかったが、それでも当時、日本の領土であったサハリン中央部の幌内川や、その周辺の温原地帯は、カワウソとテンは上流にいくほど密度が濃かった。

昭和十六年から二十年の終戦直前にかけて、わたしは二度、この生息地に足を踏み入れている。幌内川の河口近くや、タライカ湖ではほとんど夜間に活動しているとみえて、足跡しか観察されなかったが、北緯五十度に近い気屯（ケトン）川や、振戸（フレト）川やモイガ川では、昼間も人を恐れず、ゆうゆうと水面を泳ぎまわっていた。ときおり水から這い上り、立ちあがったその顔の人なつっこさが、今でも印象に強く残っている。わたしに同行したアイヌの猟師（法的には密猟）も夏には決して撃たないし冬期でも数をきめて獲ったといっていた。狩猟によって生きていた当時の民族も、その毛皮獣の絶滅がなにを意味するのか、祖先の代から厳しく教え込まれて

いたろうし、また、それを本能のうちに識っていたと思う。わたしもまた、ここで人を含めた自然について多くのことを学ばされた。

この北海道で、カワウソが乱獲されなくても、現在生き残っていたかどうかは、現存の釧路湿原や、その周辺の原野の自然的環境をみればよくわかる。その一例は、ケモノではない魚食性のシマフクロウの消息である。

このフクロウは河野メモにも記されている通り、少なくとも明治の中期までは、サケ・マスのそ上するどこの河川でも、ごく普通にみられたし、また、どこのアイヌコタンでも守り神として毎年のように、盛大に、丁重な「送り」をされていたが、和人の移住時代にも食肉用や装飾用に捕獲されたという記録はない。にもかかわらず、この鳥が保護鳥として、一般にベールをぬいだのは、昭和十年三月に天然記念物に指定されたタンチョウに、さらにおくれること、実に三十六年後のことである。

けれども、タンチョウが、わずか十数羽のなかから現在の二百五十数羽に勢力をとりもどせた背景には、広大な東部の湿原と、人手による給餌の成功があったが、このシマフクロウには、そのどちらもない。サケやマスのそ上も閉ざされ、営巣に不可欠な、樹洞をもつ川沿いの森も向こう見ずな乱開発によってほとんど失われてしまっているからである。

戦前から戦中にかけて、わたしはよく北の山を歩いた。歩いたというより、浸っていたというのが、あたっていたかしれない。補助移民で入ったところが、原生林であり、教師をしていた学校も森の中であった。

そのころ、釧路に近い別保炭山や雄別炭山の山に鳥をたずねたことがある。ここは北海道でももっとも著名なオオルリやコルリや、コマドリの生息地であったが、よくみると、ここのコマドリのメスには不思議なことに、ほとんどの個体に尾がなかった。しかし、この謎は間もなく解けた。炭住街を一歩出て沢に入ると、いたるところにカスミ網が張りめぐらされていて、そのかたわらに、オスのコマドリの入った囮り籠が吊してあった。テリトリー意識の強いオスが囮りの声に挑発されて、やみくもに、そこに飛来してはこの網にかかる仕組みになっていたのである。仕掛人どもは、そうして捕えたコマドリの中からメスの尾羽根を引き抜いて放鳥してやった。ふたたび網にひっかかっても一目で、それとわかるように、オスだけを捕えていたのだ。

このころ炭礦は、どこも出炭拡大に大わらわで、唯一つの慰めごとといえば、坑内を出て、ひと風呂浴びて、このコマドリの声をきくぐらいであったらしい。だがこうした習慣は戦後になって、炭礦が廃山になるまでずっと続いていたのである。各地で愛鳥会なるものがつくられて、コマドリをはじめ、オオルリやコガラ(ヒガラ)の鳴き合わせ大会がさかんに催され、新聞もラジオもそれに一役買っていた。

現在、釧路博物館に事務所をもつ日本野鳥の会釧路支部では、毎年盛大に探鳥会が行われ、それを母体に保護運動も一段とたかまっているが、この会のそもそものはじまりは、こうした飼い鳥の愛好家たちの結成した「釧路愛鳥会」であった。時代の変遷というものを思えば、まさに、「奇しくも」といった言葉がぴったりと合う。

(動物作家)